

花園大学
日本文学科

通信

第14号
通巻42号

二〇二二（令和四）年一月三十一日発行
編輯・発行 花園大学文学部日本文学科
〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町八、一
電話（〇七五）八一・五一八一（代）
振替 〇一〇五〇・一・四三九九五

御挨拶

高橋啓太

昨年度に引き続き、日本文学科の主任を務めます高橋です。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、本学では昨年度前期は一部授業を除いてほぼ最後までオンライン授業を継続しました。後期からは教室の収容人数を半分に減らして対面授業を開始しましたが、現二回生は昨年度、入学時のガイダンスを除いて後期までほとんど大学に入ることすらできなかったわけで、精神的に大変な半年間を送ったことと思います。コロナ禍における教育の在り方について、本年度も試行錯誤を行っていくことになるでしょう。

さて、日本でも二月からワクチン接種が開始されましたが、感染収束の兆しが見えてくるどころか、関西圏を中心に感染者は増加し続け、京都・大阪・兵庫では4月25日から再び緊急事態宣言が発出されました。本稿執筆時点（五月中旬）でも宣言は解除されてい

ません。大学全体としてオンライン授業に切り替えるという方針は出されておりませんが、受講者が一定数を超える科目はすでにオンライン授業となつています。

このような状況ですので、本通信にも記載しておりますように、誠に残念ながら、本年度の日本文学科公開講演会は昨年度に続いて中止すること致しました。人数制限を設けての開催やオンライン開催も検討しましたが、何卒ご了承ください。

本年度の学科の教員体制につきましては、専任教員が、下野健児先生（書道）、橋本行洋先生（日本語学）、秦美香子先生（現代文化）、神田邦彦先生（中世文学）、高橋（近現代文学）の五人体制となっております。また、特任教授として引き続き、曾根誠一先生（中古文学）には講義・演習をご担当いただいております。

書道コースでは、引き続き客員教授として真神巍堂先生（卒業制作担当）、嘱託教授として森田彦七先生（漢字）、日比野実先生（かな）に書道実技をご担当いただきます。

最後に、新入生に関する情報です。一昨年

度・昨年度と日本文学科の新入生は定員の六十五名を超えておりましたが、本年度の新入生は四十九名と定員を下回りました。本学科のみが低調であったわけではなく、本学全体として厳しい結果でした。大規模私大の定員抑制の効果が薄れてきたことやコロナ禍における本学の宣伝機会の減少が原因として考えられます。オープンキャンパスや高校への出張講義を通して日本文学科をアピールするため、教員一同、より一層努力して参る所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。

（本学准教授）

「日本文学科通信」発行遅延のお詫び

「日本文学科通信」は、例年六月頃にお届けしておりましたが、今年度は諸般の事情により刊行が遅れ、年を越しての刊行となつてしまいました。

早くから原稿をお寄せいただいた方々、本通信を心待ちにしていらつしやうたみなさまには大変申し訳なく存じております。今後はこのような不手際が無いよう心がけて参りますので、なにとぞご寛恕賜りますようお願い申し上げます。

（編輯担当 橋本行洋）

つながり

曾根誠一

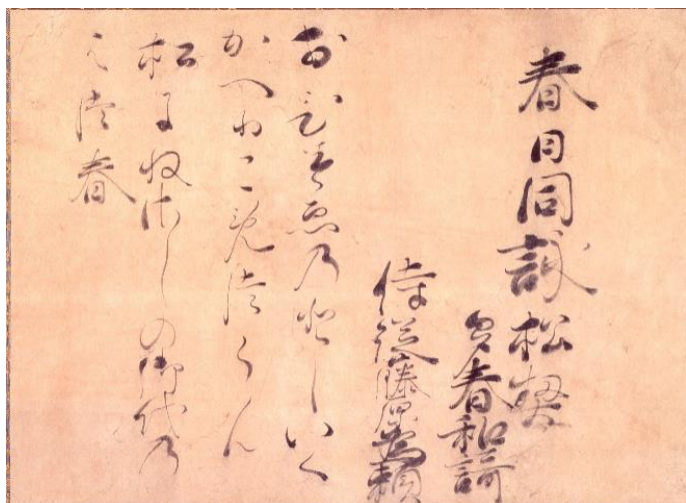
三年前、東京の古書肆の目録に、「為頼集」の江戸期写本があるのを見て、入手した。この家集については、専任として初めて勤務した、北九州市にある女子大学に在る時、東京から九州北部の女子大学に赴任している知人と、梅光女学院大学におられた森田兼吉先生にお願いで、先生の教え子や九州大学の卒業生等に参加いただいて、筑紫平安文学会を創った。その最初の輪読作品は、知人が修士論文で扱った「為頼集」で、注釈書刊行(94年)の折、「為頼集」の伝本」を担当したつながりがあった。

入手した写本は、個人所蔵のために、調査できなかった田中教忠氏本であり、猪苗代兼宜本の異文も、青筆で書き入れられていた。これに、冷泉家時雨亭文庫本と賀茂季鷹旧蔵の山本家本を加えて、「為頼集」の伝本・追考」を、昨春の文学部紀要に投稿した。

加えて、京都女子大学図書館に、谷山茂氏旧蔵の「為頼集」が所蔵されていることを知り、情報センターを通して複写をお願いし、本文を確認することが出来た。

入手した「為頼集」には、「道成集」が合綴されていたので、この校本を作り、解題を執筆する準備を進めている。江戸後期の小沢芦庵本の写本である今治市立河野美術館本・龍谷大学本・水口図書館本は、十年余り前に、科学研究費の支給を得て調査して、複写が手元にあり、神宮文庫本と尊経閣文庫本の

複製本も、昨年調査させていただいた。残る小川寿一氏本は、研究室の机辺を整理していて、九年前の東京の古書肆の目録に、書誌と巻頭一面のカラー写真が掲載されていることに気付いた(現在の所蔵者は不明)。慶応義塾図書館本は、情報センターを通して、複写をお願いしたところ、合綴された「惟宗広言集」も含めて、本文を確認することが出来た。芦庵本であるだけでなく、蔵書印から、芦庵門下の瀧原豊常旧蔵本であり、芦庵自筆本の可能性が高いようである。



(冷泉為頼筆和歌懐紙「慶應義塾大学斯道文庫蔵」)

詳細を詰めるのは、これからだが、勤務の晩年に、これまでの研究を補い、深めることのできる幸運が、続けて起こり、くすしき因縁、つながりを実感している。作品を読み直し、新たな解釈を提示する研究の一方で、地味ながら、伝本調査を重ねて事実を把握し、積み上げることで理解が深まる研究を、楽しんでいく。

(本学特任教授)



(曾根誠一先生「一九九〇年」)



(曾根誠一先生「近影」)

珈琲店にて

山崎知子

花園大学での在職歴が長くなるにつけ、経験からこの場面はこうだと決めつけることが多くなっているかもしれない。

今年福岡出張の帰りに自家焙煎珈琲店に寄った。二〇年ほど前に開店した店で漆喰の壁が珈琲の焙煎に燻され、まだら模様になっている。茶色で統一された店内に京都の有名な茶筒に珈琲豆が入れられており、ネルを店主が手縫いするこだわりの珈琲店である。窓に入り込む西陽を感じながらネルドリツプで濃く抽出された珈琲を堪能した。その時に思い出したのが、かつて京都に存在した小さな珈琲店のことである。

私は五年ほど前から自家焙煎珈琲に興味がある。阪急西院駅近くの小さな珈琲店が気に入りだった。ほぼ誰もおらず、若い店主から珈琲の蘊蓄を聞きゆつくりと時間を過ごすのが好きだった。ある秋の雨の日、若い同僚と帰途が一緒になった。彼女の家の近所でもある珈琲店へ一緒に行き珈琲を飲んだ。彼女の通勤仲間である男性同僚も珈琲好きで、別の日に三人で珈琲を飲みにも行った。私は二人の同僚ともに仕事で密接に絡むことはなく、珈琲がつかない縁だと思っていた。その翌年の三月に女性同僚は結婚退職、男性同僚は地元への転職が決まり、大学を離れることになった。送別会はその珈琲店と決め、三人で珈琲を飲んだ。その時の状況は私を含めた三人の大学教職員である客と珈琲

店の店主と考えていた。後にわかることだが店主は関東への店舗移転を考えており、実は京都を離れる三人と残る私という状況でもあった。

この例のように一つの物事はある一面から見た状況と異なる面を見せる。花園大学は二〇二二年に学園創立一五〇周年を迎え少しずつ変化している。教職員の退職や就任も多く、私はいつの間にか中堅か古参職員に押し上げられている。新任教職員には大学のことを教えるものと思ってきたがそうではない。他を経験しているからこそ言える価値観や長く花園大学にいただけではわからない刺激を貰う毎日である。これも物事の一面を見るだけではわからない事である。今後は一面だけを見るのではなくその他の面はどう見えるかを考えながら仕事に取り組んでいきたい。

(一九九二年度卒業生)



近況

徳永壮太

私は現在、放課後等デイサービス・学習塾での子ども達への学習や療育の支援を行っています。当時花園大学で書を学んでいた頃の自分は、今のこの状況を想像する事はできなかっただろうと思います。なぜなら、その当時は現在と全く異なる目標を掲げていたからです。

大学在学中に将来の事を考え、就職ではなく大学院へと進学し、将来的には書道科の教員として働きたいと考えていました。大学院に進学され、書道科の教員として働かれています。先輩と接して「尊敬する先輩のようにになりたい」と思うようになったのが主な理由です。そして大学卒業後、大阪教育大学の大学院（教育学研究科・美術研究コース）に進学しました。

しかし、全く新しい環境に馴染むことが出来ず、さらに難易度の高い課題に追われる日々には耐えられなくなり、心身のバランスを崩してしまいました。その結果、私は一年足らずで大学院を自主退学しました。その後地元に戻り、アルバイトをこなす日々が続く、別の会社に正社員としても働きましたが長続きせず、またアルバイトの日々が続きました。そんな中、偶然縁があつて今の仕事に携わる事ができました。このように私は、大学を卒業してから現在に至るまでだけでも本当に多くの出来事を経験し、そしてその経験から多くの事を

学ぶことができました。

自分の内面的な特性を少しづつ理解できた事、自分の周りには自分の知りえない感情が無数に存在している事、自分以上に困っている人達がいて、その人達の手助けをする事の大事さ等、列挙しきれない程です。

現在働いている放課後等デイサービスや学習塾では、あらゆる子ども達と接する機会があります。

悩みを抱えているが、それを言葉にすることが出来ない子、発達障害や自閉症スペクトラム症等で日々の生活や学習で支障をきたしている子もいます。そういった子ども達や家族への支援を計画し、実行する事が私の現状です。

大学生の頃に掲げていた将来の目標と現状、全く異なりますが、私は誇りをもって今の仕事が出来ています。本当に幸せな事です。今後も自分のこれらの経験に基づいた考えや思いが、悩みを抱えている誰かの手助けに繋がられるように模索していきます。

(二〇一六年度卒業生)



『花園大学日本文学論究』第13号

(二〇二〇年十二月刊行)

【論文】

・石作皇子条庫持皇子条条の断層試解―地の文の敬語表現と世評を手懸かりにして―
曾根 誠一

・西園寺実兼編『啄木調』考―秘曲「啄木」の口伝書 付翻刻―
神田 邦彦

・谷崎潤一郎「卍」―人物像の変遷について―
「女学生ことば」使用の観点から―
福田 博則

【研究ノート】

・児童文学作品の翻訳・翻案に見られる、文化規範の翻訳
秦 美香子

・受贈図書目録

(二〇一九年一〇月～二〇二〇年九月)

◇入手希望の在学生は、共同研究室(日本文学・書道)まで申し出てください。

◇購読をご希望の方(卒業生・一般)は、花園大学日本文学科あてにご連絡ください。

編輯後記

◆本年度を以て曾根誠一教授が御退休になる。しかし御本人を見てみると、凡そ「御退休」とは縁遠い感じで、精力的に研究をなさっている。「もう歳だから」と最近はお癖のようにおっしゃるが、それも「サボる口実」(失礼)としか思えない。それでも「三月二〇日までに研究室を明け渡さなければ…」とおっしゃる時に少し悲しげな表情をなさる。自分もそう遠くない定年退職の際に、こんなに格好よく振る舞えるだろうか、と心配になる今日この頃である。(Y)

◆COVID-19は19どころか22になってしまった。以前は対面で行っていた行事がZoomで行われるようになって久しい。この状況が続くと、将来原状に復帰した時(来るのだろうか?)に、元の対面でのやり方を知っている者がいなくなるのじゃないか、という懸念が脳裏をよぎる。あたかも途絶えた伝統芸能や祭礼を復活させるような努力が必要になるんじゃないか?と本気で心配になってしまったのである。(Y)

◆今号は、様々な事情が重なったとは言え、責任者である私の怠慢によって刊行が大幅に遅れてしまいました。謹んでお詫び申し上げます。(Y)